

テーゼの快楽と危険——ミシェル・ウエルベックと「新しい反動」論争をめぐる¹

関大聡（東京大学）

2022 年 11 月、ミシェル・ウエルベック『発言集』の日本語訳が刊行された²。これまで小説は最新作 *Anéantir* を除くすべて、エッセイは作家論二冊（ラヴクラフト論、ショーペンハウアー論）が翻訳済みだったが、未訳だった同書の欠落が埋められたことで、残るは奇妙にも脚光を浴びないままの詩集数点の翻訳が待たれるばかりだ。

『発言集』はデビュー直後の 1992 年から 2020 年までに新聞や雑誌に発表された雑多な文章群であり、厭世的で人間嫌いと呼ばれるウエルベックが公的な議論の場への「介入」を厭わぬ人物でもあることが分かる。分類困難な文章群にあえて分類を試みるなら、同書には「作家論・作品論」、「文学・芸術論」、「序文、あとがき」、「社会・政治論」、「インタビュー、自作解説」、「身边雑記、私的エッセイ」、「準作品」が混在している。このうち、「インタビュー、自作解説」はウエルベックの小説の読者にはとっつきやすく、作者自身が小説を評する声を聞く貴重な機会であろう。また「身边雑記や私的エッセイ」は特段の前提がなくともユーモアある肩の力を抜いた文章を楽しめる。他方で、「作家論・作品論」の一部や「社会・政治論」に分類できるテキストは、日本の読者には馴染みの薄い固有名詞やフランス特有の社会状況を理由に、読みにくい印象を与えるかもしれない。充実した訳注は読解を補助するための試みであるが、本稿では、2002 年頃からウエルベックも巻き込まれた「新反動主義」をめぐる論争に関して、この補助作業の延長を試みたい。

「反動」という語は非常に論争的な概念であり、あらかじめ検討する必要がある。フランス語で *réaction* と綴るこの語は、*action* の対義語である。日本語では、「行動・活動」に対する「反応・反動」、「作用」に対する「反作用」とも訳すこともできる。しかし、この語の歴史を辿ったジャン・スタロバンスキーの『作用と反作用』によれば、古典ラテン語における *action* (*actio*) の対義語は *passion* (*patio*) であった³。ラテン語における能動態と受動態の対を考えれば、この点は了解されよう。接頭辞の *ré* を加えた *réaction* の語が *action* の対義語として導入されたのは、中世前期から遅くとも 12-13 世紀にかけてのことで、アリストテレス哲学における運動の様相を説明する学術用語であった。この語の普及に決定的な役割を果たしたのはアイザック・ニュートンである。『プリンキピア』（1687）に示された運動の第三法則（作用・反作用の法則）は、以来、さまざまな学問領域（化学、生理学、医学、精神分析、精神医学、文学、哲学……）の現象を説明するために用いられた。政治の世界も例外ではない。フランス革命以降、とりわけバンジャマン・コンスタンの『政治的反動』（1797）を通して、この語の

¹ 本稿は関大聡「ミシェル・ウエルベックと新反動主義」『図書新聞』2021 年 2 月 20 日（3484 号）、4 月 17 日（3492 号）を全面的に改稿したものである。

² Michel Houellebecq, *Interventions 2020*, Paris, Flammarion, 2020. [ミシェル・ウエルベック『発言集』西山雄二ほか訳、白水社、2022 年]

³ Jean Starobinski, *Action et réaction. Vie et aventure d'un couple*, Paris, Seuil, 1999. [ジャン・スタロバンスキー『作用と反作用 ある概念の生涯と冒険』法政大学出版局、2004 年]

語義は特定の価値を帯びるようになった。当時、啓蒙思想の核心にある人間の「改善可能性 *perfectibilité*」への信頼を基盤に、歴史や社会の「進歩」への期待が共有され、抑圧からの自由や個人間の平等を内実とする進歩に反対する勢力を「反動」と呼ぶようになったのだ。このため、「反動」とは歴史の「進歩」への逆行を目指す動きの謂いとなり、革命以後の文脈では「反革命」の立場と同一視された⁴。

非常に手短なまとめではあるが、以上からも「反動」という語が中立的でなく論争的な用語であることは知られよう。そこでは進歩と反動という対概念が前提とされ、進歩に与する立場からすれば、反動は軽蔑の的になる。もっとも進歩が何を意味するかについては歴史や社会、立場により異なる⁵。今日では、進歩主義とはリベラルで左派的な立場として認識され、一般的原理として民主主義と人権を尊重し、経済的不平等の是正を目指し、社会的論点として性別、性志向や人種、民族の多様性を推進する立場と見なされよう。だが、リベラルが批判され、進歩という前提自体が自明性を失う時代にあつては、反動という呼称は軽蔑を押し退け、再評価の対象にすらなる⁶。本稿は、反動の価値評価や、「ウエルベックは反動か否か」という決定困難な問いに対して結論を出すことを目指すものではない。私たちが出発点とするのは、2002 年頃からウエルベックを語る上で（彼だけに限らないが）「反動的」という形容が目立つようになったという経験的観察である。なるほどそうした形容は、ウエルベックを擁護する文脈でよく言われるように、レッテル貼りによって作家の微妙な思想や立場を隠し、何よりテキスト自体を読むことから目を逸らすことになるかもしれない。だが他方で、「なぜフィクションを主な領域とする作家に対して反動という形容が付与されるのか」という問いかけは、フランス社会におけるウエルベックの公的なイメージと振舞い、さらに彼のテキストのいくつかの側面を照らし出すことに貢献もするはずである。そして何より、こうした「進歩」や「反動」という二極化した議論を通して、現代フランスの言論の力学が浮かび上がるはずである。このように、本稿では発見学的な意味をもつ語として「反動」の語を用いることにしたい⁷。

⁴ 「18 世紀後半の数十年に重要な変化が生じた。一方で、「進歩」の語は以前のような中立的（時間や空間を指す）意味ではあまり用いられなくなり、改善の観念と結びついた新しい意味を帯びた。他方、同時並行的に生じたことだが、当時の政治闘争のなかで、進歩—改善への抵抗はもはや、「人間の根本悪」にではなく、特定の社会集団や政治勢力に責任を負わされることになった。実詞化した「進歩」（長い間複数形で用いられていたが、ここでは単数形になる）が善であるなら、その足かせになるものも対称的に、同様に実詞化された対立物に帰することができるだろう。この役割は、すでに見たように 18 世紀のあいだ意味の拡張を遂げてきた「反動」という語と概念により果たされることになる。従来の意味を捨てるわけではないが、新しい価値を帯びたこの語は、政治闘争の言語として導入されることになるのだ。」 *Ibid.*, p. 306-307.

⁵ スタロバンスキーも指摘するように、マルクス主義の華やかなりし時代、プロレタリア革命に与さぬ勢力は（たとえ社会民主主義のような穏健な左派であっても）反動と呼ばれた。

⁶ たとえば歴史家マーク・リラの以下の著作を参照。Mark Lilla, *L'esprit de réaction* (2016), traduit de l'anglais par Hubert Darbon, Paris, Desclée de Brouwer, 2019. [マーク・リラ『難破する精神：世界はなぜ反動化するのか』会田弘嗣、山本久美子訳、NTT 出版、2017 年] 文学研究者のアントワーズ・コンパニオンは、自身が論ずる「アンチモダン」を政治的反動から区別しているが、結論部を「魅力的な反動」と題し、「これ以上完璧なアンチモダンの定義は見つかるまい」と述べている。Antoine Compagnon, *Les Antimodernes* (2005), Paris, Gallimard, nouvelle édition, 2016, p. 548. [アントワーズ・コンパニオン『アンチモダン 反近代の精神史』松澤和宏監訳、名古屋大学出版会、2012 年、350 頁]

⁷ アルバート・O・ハーシュマンも「反動」という語がもつ軽蔑の意味合いに注意を促しつつ、語の一般的

第一節では、ウエルベック初期作品をめぐる言説の再構成から話を始める。『素粒子』（1998）の成功を契機とする論争や『プラットフォーム』（2001）刊行後の訴訟沙汰を取り上げ、反動的という評価が形成された経緯を明らかにする。第二節ではダニエル・リンデンベルクの著書『秩序への回帰』（2002）以降の「新反動主義」論争と、それに対するウエルベックの応答を確認する。第三節では、ウエルベックの小説における作者の思想表現という問題に関して、やや一般的な考察を展開するつもりである。なお、紙幅の関係もあり『プラットフォーム』までの作品に議論を絞るが、本稿の関心から言って『地図と領土』（2010）や『服従』（2015）のようなテキストが別個に検討されるべき高い重要性をもつことは言うまでもない。

1. 初期作品から『プラットフォーム』まで——「ミソジニー」で「イスラム嫌い」のウエルベック？

「あなたが生きている社会はあなたのことを破壊しようとしている⁸」。詩的マニフェストというべき『生きてあり続けること』（1991）に見られるこの言葉は、ウエルベックの社会観を端的に要約する。作家はこの暴力的な社会を「リベラル社会」と名指す。同年発表のラヴクラフト論でも、「リベラルな資本主義はあらゆる人々の意識にまで支配を拡大してきた⁹」と述べ、1996年の詩集『闘争の感覚』所収の詩「自由主義に対する最後の防波堤」はさらに雄弁である。

人間のあらゆる活動がしだいに経済的基準のみから評価されるようになってきた、この点に議論の余地はなく、明らかだ

それは完全に数値的な基準であり

情報ファイルに記録可能である。

こんなことは許容できない、私たちは経済を管理下に置き、あえて「倫理的」と呼びたい基準に従属させるため、闘わねばならない [...] ¹⁰

これは詩というよりもアジビラ（アジテーション目的のビラ）のような印象を与えるかもしれない。実際、ウエルベックの初期作品には経済的自由主義に対する批判という傾向が強く伺える。この経済的自由主義批判は、政治的には左でも右でも展開できる主題である。左からなら経済的自由主義は資

普及に鑑みて使用する旨を論じている。Albert O. Hirshman, *The Rhetoric of Reaction : Perversity, Futility, Jeopardy*, Cambridge, Harvard University Press, 1991. [アルバート・O・ハーシュマン『反動のレトリック 逆転・無益・危険性』岩崎稔訳、法政大学出版局、1997年]

⁸ Michel Houellebecq, *Rester vivant : méthode* (1991), dans *Houellebecq 1991-2000*, Paris, Flammarion, 2015, p. 149. 以下、『H.P.ラヴクラフト』（HPL）、『生きてあり続けること』（RV）、『闘争領域の拡大』（EDL）、『闘争の感覚』（SC）、『素粒子』（PE）からの引用については、略号を用い、ページ数は当該著作集から指示する。『プラットフォーム』（PF）に関しては著作集2巻（*Houellebecq 2001-2010*, Paris, Flammarion, 2016）を用いる。

⁹ HPL, p. 116. [ミシェル・ウエルベック『H・P・ラヴクラフト：世界と人生に抗って』星柊守之訳、国書刊行会、2017年、194頁]

¹⁰ « Dernier rempart contre le libéralisme », SC, p. 466. このタイトルはサルトルがフーコーを評して言った「ブルジョワジーがマルクス主義に対して築いた最後の防波堤」という言葉のもじりであり、左派知識人的な文脈が暗示されている。

本による搾取、個人の疎外として理解されうるし、右からなら伝統的家族や国家利益の破壊として理解されうる。この経済的自由主義が性の領域にまで拡大されたというのが小説デビュー作『闘争領域の拡大』(1994)を支える根本的認識であり、そこにも「あらゆる経済的、社会的システムの中で、資本主義は間違いなく、最も自然なシステムだ。それがすでに、資本主義が最悪のシステムであることを十分に表している¹¹」という語り手の言葉が見える。すでに敏感な読者の眉を顰めかねない言説(「フェミニズムの成れの果て¹²」への嫌悪など)は登場するが、名前をもたない一人称の語り手の発言は、疎外された人間の暴走(殺人の教唆にまで至る)と解するなら、作者の意図(疎外された人間を描くことを通じて現代社会を批判している)を好意的に解釈することは可能だ。こうした手法は、ウエルベックが影響を受けたブレット・イーストン・エリスの『アメリカン・サイコ』にせよ、関連を指摘されるカミュの『異邦人』にせよ、珍しいものではない。資本主義(経済的自由主義)に対する彼の批判こそ重要だという判断に基づき、「ウエルベック左派」の立場をとることは実際可能である¹³。

そのため、美術理論家のニコラ・ブリオーや作家のジャン＝イヴ・ジュアネを中心に結成されたグループ「垂直」(*Perpendiculaire*)——現代アートを主な領域とし、政治的には左派に属する——も、1995年の雑誌創刊時にウエルベックを編集委員に招くことができた。「ミシェル・ウエルベックが雑誌の創設に加わったのは、彼が文学のなかに私たちの探求に合致するいくつかの主題(リベラリズム批判、平凡さの追求)を持ち込んだからだ¹⁴」と後に説明している。他に、『アート・プレス』や『レザンロキュブティブル』などの左派系カルチャー誌も初期からウエルベックを取り上げてきた¹⁵。

そこに最初の爆弾を投じたのが『素粒子』(1998)である¹⁶。この小説では、自由主義が引き起こす苦痛やそれに蝕まれた西洋の衰退といった主題が、六八年五月革命を経験した世代と、それ以降の社会風俗の自由化に責任があるものとして展開される。登場人物のブリュノは、アメリカの州検事であるダニエル・マクミランの意見を次のように紹介している。「九〇年代の〈連続殺人犯〉は六〇年代〈ヒッピー〉の私生児なんだ。[...] ウィーン・アクションスト、ビートニック、ヒッピー、シリアル・キ

¹¹ EDL, p. 385. [ミシェル・ウエルベック『闘争領域の拡大』中村佳子訳、河出書房新社、2018年、160頁]

¹² *Ibid.*, p. 260. [同前、10頁]

¹³ 次の二著を代表的な左派の読解に分類することができよう。Bruno Viard, *Houellebecq au laser. La faute à Mai 68*, Nice, Les Éditions Ovadia, 2008 ; Bernard Maris, *Houellebecq économiste* (2014), Paris, Champs essais, 2016. いずれも、計算やエゴイズムを原理とする自由主義社会に反対して、共感や贈与、高邁さや愛といった道徳的価値を重視する、モラリストとしてのウエルベックを強調している。

なお、初期のウエルベックの政治的関心として、明確な反EU主義を挙げることができる。1992年、EU創設にかかわるマーストリヒト条約が締結され、フランスでも国民投票が行われたとき、ウエルベックは左派文芸誌『レットル・フランセーズ』誌に、一種のフランス語ナショナリズムに依拠した反対意見を表明した。EUに対する作家の軽蔑はその後も『発言集』の随所に見出される。Michel Houellebecq, « Rentrée littéraire chez les Navajos », *Les lettres françaises*, n° 24, septembre 1992, p. 9.

¹⁴ La Revue Perpendiculaire, « Pourquoi nous divorçons... », *L'Événement du jeudi*, 17 au 23 septembre 1998, p. 60.

¹⁵ 最初期のウエルベックが活動した雑誌については以下の論文も参照。Russel Williams, « La vie littéraire inconnue de Michel Houellebecq : 1988-1996 », dans *Cahier Michel Houellebecq*, Agathe Novak-Lechevalier (éd.), Paris, Les Cahiers de l'Herne, 2017, p. 79-83. 著者は立場の多様な複数の雑誌を挙げている (*La Nouvelle Revue de Paris*, *Digraphe*, *Jungle*, *NRV*, *Présage*)。

¹⁶ 『素粒子』のメディア受容については以下の論文を参照。Vincent Guiader, « L'extension du domaine de la réception. Les appropriations littéraires et politiques des *Particules élémentaires* de Michel Houellebecq », *Comment sont reçues les œuvres*, Isabelle Charpentier (dir.), Paris, Créaphis, 2006, p. 177-189.

ラーはいずれも自由と解放を絶対視し、あらゆる社会的規範、そして彼らに言わせれば道徳、感情、正義、憐れみとその典型であるあらゆる偽善に対する個人の権利を絶対的に肯定する姿勢において共通する。そうした意味においては、チャールズ・マンソンはヒッピーから逸脱した化物ではいささかもなく、むしろその論理的達成なんだ¹⁷」。小説の爆発的成功により、そこで表明されるニヒリズム的な見方や、とりわけ主要登場人物であるブリュノの人種差別的と受け取られかねない態度を、どの程度まで作者自身が共有しているのかが取り沙汰された。

ウエルベック自身、その推測の種になるものを残している。たとえば小説刊行の二年前、「中世以来何も起きていない¹⁸」(1996)という題のインタビューが『即刻』誌 (*Immédiatement*) に掲載されたが、これは王党派 (反革命で王権の復古を主張する立場) の雑誌である。そこでウエルベックは当時のローマ教皇ヨハネ・パウロ二世を「現代世界について包括的ビジョンをもつ唯一の人¹⁹」と評するが、『素粒子』のブリュノもヨハネ・パウロ二世についての文章を書き、「ヨーロッパでいったい何が起りつつあるのかを理解していたのはほかでもない、ヨハネ＝パウロ二世ただ一人だった²⁰」と主張していた。また、同じインタビューでウエルベックはカトリックへの強い共感を示し、中世以降の個人の自由の増大がいかに人間を窒息させてきたかを語る。こうした近代批判者であるウエルベックは、自由の重みに苦しみ喘ぐ『素粒子』の登場人物たちの思想的後見人だと受け取られたのである。それに加え、すでに『素粒子』においてブリュノは作中に実名で描かれた作家フィリップ・ソレルスによって「反動」と評されていた。「あなたは反動家だ。結構なことです。偉大な文学者は全部反動家なんです。バルザック、フロベール、ボードレール、ドストエフスキー。どれも反動家ばかり²¹」。こうしたパロディ的な言い回しも、彼ら「偉大な作家」との縁戚関係を主張するウエルベックも「反動」だとする受容の仕方を、あらかじめ規定したように思われる。

¹⁷ PE, p. 781 [ミシェル・ウエルベック『素粒子』野崎敏訳、筑摩書房、2006年、289-290頁]

¹⁸ Michel Houellebecq, Sébastien Lapaque et Luc Richard, « Il ne s'est rien passé depuis le Moyen Âge » (1996), dans *Cahier Michel Houellebecq, op. cit.*, p. 71.

¹⁹ *Ibid.*, p. 71.

²⁰ PE, p. 745. [『素粒子』前掲書、246頁] エッセイの記述を小説に再利用する手続きは、ウエルベックに頻繁に見られる。二つの例を挙げよう。

①「男は何の役に立っているんだろう。大昔、まだ熊がうじゃうじゃいたころならば、男らしさは特別な、他に代えがたい役割を演じていたのかもしれない。」(『素粒子』224頁)

「結局、もっと一般的にみて、男性は何の役に立つのだろうか。熊がたくさんいた時代には、男らしさが特別な、かけがえのない役割を果たしていたのではないかと想像できるが、今日ではどうだろうか。」(「男は何の役に立つと言うのか」(1997)『発言集』88頁)

②「夜八時、ニュースキャスターのブルノ・マジュールは、アメリカの衛星による調査で火星上に生命体の化石が発見されたというニュースを紹介した。」(『素粒子』169頁)

「昨年の夏、七月中旬ごろ、午後八時のニュースでブリュノ・マジュールが「アメリカの探査機が火星で化石化した生命の痕跡を発見した」と発表した。」(「くま皮」(1997)『発言集』90頁)

備考1: 「くま皮」で言う「昨年の夏、七月中旬ごろ」とはエッセイ発表のタイミングから考えて1996年の夏を指すはずだが(この年、実際にNASAの発表が世間を賑わせた)、『素粒子』の物語の時間軸でこのエピソードが語られるのは1998年7月15日のこと。同じ指示対象をもつはずの記述なのに、二年の隔たりが生まれている。「フィクション化」の過程で生ずる奇妙な改変の一例と言ふべきだろう。

備考2: 両テキストの初出は『レザンロキユプティブル』98号、99号であるが、原著および翻訳が同エッセイを含む連載期間を「90-97号」としているのは「92-99号」の誤り。

²¹ PE, p. 749. [『素粒子』前掲書、252頁]

このため、『垂直』誌の同人はウエルベックと議論の場を設けて彼自身の見解を尋ね、結果としてウエルベックは同誌から離脱することが決まった。発行部数数千部程度の小雑誌内部での決裂は、『フィガロ』をはじめ各誌に引用され報じられることで「ウエルベック事件」に発展する。メディアでは議論を「政治裁判」、「知的テロ」と報じて批判する論調が目立ったが、実際の議論は（活字ではその空気まで伝わらないが）中傷が飛び交う類のものではなく、ウエルベックに反動の嫌疑を問い質しはするが、断定口調ではない。

JFM- 君の書くものを読むと、「失われた価値」が存在するような気がする。習俗や社会におけるある種の発展を、私たちの世代は成功、進歩、勝利した闘争と考えるが、君はそれを破局的事態として描く。そこにはきわめて反動的な右翼に同一視されるリスクがないだろうか。

MH（ウエルベック） - 反動的右翼には複数のカテゴリーが存在する。本質的には二種類だ。まずは復興異教主義者だが、私は彼らとまったく関わりがないし、卑劣で危険な馬鹿者どもで、それに悪魔崇拝に近い。他方で伝統主義的なカトリックがいる。私は彼らのことは感じが良いと思う。だが彼らの方が、神を信じていないという理由で私と距離を置いてくる。すべてはその一点なんだ、たとえ私が中絶に反対でもね。同じように私はカトリックの集会にはすべて強い共感を抱いている。同情というのは私にとって中心的な価値を形成する。それもカトリック教徒にとって以上にだ。だから私は仏教に鞍替えしたんだ。²²

メディアを巻き込んだ事態の拡大に鑑み、『垂直』のメンバーは「ウエルベック、不明瞭の時代」と題した寄稿を『ル・モンド』（1998年10月10日）に発表した²³。前述の『即刻』誌掲載のインタビューを挙げ、ウエルベックの言動は単なる挑発ではなく、その政治的内実を正面から受け止めるべきだと主張する内容である。だが、ウエルベックの小説の版元でもあるフラマリオン社から刊行されていた『垂直』誌は、この事件の影響もあり間もなく終刊を迎え、沙汰止みになってしまう。

とはいえ、アート関係誌で「事件」は根深い反響を残した。『アート・プレス』誌（『垂直』誌のジャン＝イヴ・ジュアネが副編集長を務めていた）は事件が沈静化した1999年の3月号で「新装のニヒリズム」という特集を組み、作家・批評家のフィリップ・フォレストとマリー・ルドネの論考を掲載した²⁴。両論考については後述するが、いずれも『素粒子』における女性の扱いをひとつの論点としながら²⁵、作品に現れるニヒリズムや、そうしたニヒリズムが反動的ファシズムに誘惑される危険性を

²² Michel Houellebecq, J. F. Marchandise, J.-Y. Jouannais et N. Bourriaud, « Je crois peu en la liberté » (1998), repris dans *Cahier Michel Houellebecq, op. cit.*, p. 110. ここでの「復興異教主義者」(néopaïen) はアラン・ド・ブノワを筆頭とする新右翼団体 GRECE を指すものと思われる。ブノワについては後の注も参照。

²³ Revue Perpendiculaire, « Houellebecq et l'ère du flou », *Le Monde*, 10 octobre 1998.

²⁴ Philippe Forest, « Le roman, le rien », *Art Press*, n° 244, mars 1999, p. 51-58 ; Marie Redonnet, « La barbarie postmoderne », p. 59-64.

²⁵ たとえばルドネは、「女の方が男より善良なのだ。女の方が優しく、愛情に満ち、思いやりがあつて温和」（『素粒子』224頁）という登場人物ミシェルの考えに対して、「女性には善意と愛を、男性には、主人公のジェルジンスキのように、認識への英雄的情熱を。ウエルベックの小説は出来合いの道を離れて冒険しようとしなさい」（*Ibid.*, p. 63）と述べ、その性別役割付与を批判した。ウエルベック自身、『垂直』誌の議論で、

批判している。これに続く形で1999年7-8月号には作家、美術批評家のギー・スカルペッタが「新しい反動たち」という論考を掲載する²⁶。この論考は、知るかぎりウエルベックを「新しい反動」として扱った最初のものであるが、「新しいものへの体系的な憎悪」を理由にウエルベックを反動と指弾し、そのイデオロギーの要点を次のようにまとめる。(1) 現代の全面的拒絶、(2) すべての悪は六八年五月革命に由来する、(3) 左翼への集中攻撃、(4) 芸術の死の主張²⁷。さらに、こうした傾向はウエルベックだけでなく他の作家（マルク＝エドゥアール・ナベ、ドミニク・ノゲーズ、フィリップ・ミューレ、ブノワ・デュトゥールトウル）にも見出されるとする。こうして『素粒子』の発表以降、ウエルベックは「憂鬱主義」という称号を与えられただけでなく、そのイデオロギー的な一貫性についても問い質されることになったのである。

だが、論争を真に加速させたのは『プラットフォーム』（2001）の刊行である²⁸。東南アジアのセックス観光を主題にしたこの小説は、実在の企業やガイドブックを名挙げたことでこれらの企業から真っ先に批判されたが、「事件」として耳目を集めたのは2001年9月の『リール』誌に掲載されたインタビューである。ここでウエルベックは（かなりアルコールを摂取していたようだが）「イスラムは何と言っても一番馬鹿な宗教だ²⁹」と口走る。発言はただちにメディアに報じられ、「宗教への帰属を理由にした特定集団の人々への差別、憎悪、暴力の扇動に対する加担」および「侮辱」のかどで訴訟に発展した。インタビューの文脈を確認しよう。作家はまず「一神教に対する全面的な拒絶」を表明し、この枠組みでアブラハムの三宗教を比較している。ユダヤ教は少なくとも「文学的才能」によって聖書を「美しい」書物にしたとし、カトリシズムについては多神教的側面を理由に「残りものの共感」を抱いているとする。つまり、このインタビューでウエルベックは宗教（一神教）全体に批判的な姿勢を示しており、イスラム批判の「一番」という最上級は、程度の差こそあれユダヤ教もカトリシズムも「馬鹿」の列に置くことを可能にする。そこからウエルベックはイスラムへの批判をさらに展開させる。

MH: [...] 幸運にもイスラムに明日はありません。一方で、神は存在しないし、どんな馬鹿でも

登場人物ミシェルの女性優位的な見方を共有すると述べている。こうした女性の理想化はミソジニーと表裏一体なものと受け取られかねないが、それをアメリカのラディカル・フェミニストであるヴァレリー・ソラナスの思想に接近させることで、ミソジニー・反フェミニズムという想定しうる批判を回避しようとしている。ソラナスへの評価については、1998年に仏訳が刊行された彼女の著作『SCUM マニフェスト』に付されたウエルベックのあとがき「人類、第二段階」（『発言集』所収）も参照されたい。

²⁶ Guy Scarpetta, « Les nouveaux réactionnaires », *Art Press*, n° 248, juillet-août 1999, p. 54-61.

²⁷ 「芸術の死」はウエルベックにあまり似つかわしくない論点だと思われるかもしれない。この点で指摘しておくべきは当時『アート・プレス』誌が置かれていた政治・美学的な立場である。同誌では1997年5月号で「極右が現代アートを攻撃する」という特集が組まれている。これは極右のアラン・ド・ブノワが主宰する雑誌『クリシス』で現代アートを批判する特集が組まれ、そこに左派の知識人（ジャン・クレール、ジャン・ボードリヤール）なども寄稿したことへの批判である。ジャック・アンリックやカトリーヌ・ミエなどの雑誌主宰者は、芸術と政治の関係に敏感な時期を迎えていた。

²⁸ 『プラットフォーム』とそれに続く訴訟事件については以下の論文を参照。Jérôme Meizoz, « Le roman et l'inacceptable. Sociologie d'une polémique : Plateforme de Michel Houellebecq », *L'œil sociologue et la littérature*, Genève, Slatkine Érudition, 2004, p. 181-209.

²⁹ Michel Houellebecq et Didier Sénécal, « Entretien », *Lire*, n° 298, septembre 2001, p. 31.

そのことにいつか気づくからです。長期的に見れば真実が勝利を収めます。他方で、イスラムは資本主義によって内部から蝕まれている。願うべきは一刻も早く資本主義が勝利することです。唯物論は程度の低い悪ですから。それが価値とするものは軽蔑に値しますが、イスラムと比べれば破壊的ではないし残酷さも劣ります。³⁰

これらの発言を『プラットフォーム』の三人の登場人物の発言と比較してみよう。

〔アイーシャ〕あの人たち〔イスラム教徒の家族〕は貧しいってだけでなく、それに輪をかけてバカなんです。

〔エジプト人化学者〕宗教は一神教に近づくほど——ここが肝心だよ、ムッシュー——非人間的で、残酷になる。そしてイスラムはすべての宗教のなかで、最もラディカルな一神教を強いる。

〔ヨルダン人銀行家〕私にしたら、イスラムのシステムに明日がないのは疑いようがありません。資本主義の方が強いでしょうな。アラブの若者たちのあこがれはすでに消費とセックス以外にありません。ときおり、そんなことはないと言ひ張る者もいますが、内に秘めたる憧れは、アメリカの経済モデルに仲間入りすることなのです。³¹

すでに優れた論考で分析されたように³²、インタビューにおけるウエルベックの発言は、(1) イスラムへの嘲笑的形容、(2) 一神教への批判、(3) 宗教に対する資本主義の将来的勝利、という登場人物三者の発言の趣旨と合致している。もちろん詳細な分析を俟たずとも、ここにひとはウエルベックの明白なイスラム嫌いを見てとった。かつて『闘争領域の拡大』の語り手に「資本主義が最悪のシステムである」と言わせていたウエルベックが、ここでは唯物論の精神を「程度の低い悪 *le moindre mal*」と表現し、宗教的システムの方を危険視する。こうして『プラットフォーム』とともに、経済と性（そして両者を支える自由主義体制への憎悪）というウエルベックの小説を構成する二大主題に、宗教という三つ目の主題が加わる³³。『リール』誌の編集長ピエール・アスリーヌは、インタビューが掲載された同号および次号の論説欄で彼を批判し、『プラットフォーム』の登場人物ミシェルとインタビューで語る作者ウエルベックはその思想において区別できず、「ミシェルとウエルベックは同一人物であ

³⁰ *Ibid.*, p. 31-32.

³¹ *PF*, p. 30, 251, 343 [ミシェル・ウエルベック『プラットフォーム』中村佳子訳、河出文庫、2015年、30頁、282頁、389頁]

³² Jérôme Meizoz, « Le roman et l'inacceptable... », art. cit.

³³ とはいえ、キリスト教（カトリシズム）はウエルベックにおいて初期から重要な主題であった。「自由主義に対する最後の防波堤」で彼が自由主義を拒絶する理由のひとつが、「福音の社会的使命に関するレオン十三世の回勅の名において、そして古代の預言者たちがエルサレムの頭上に破滅と呪いを呼びかけたのと同じ精神において」だったことを指摘しておこう。« *Dernier rempart...* », *CS*, p. 466.

る³⁴」と断定した。こうして『素粒子』から『プラットフォーム』に至るまでに、ミソジニーでイスラム嫌悪のウエルベック、というその後も反復されるイメージが形成される。歴史家のダニエル・リンデンベルクが『秩序への回帰：新反動主義の調査』（2002）でウエルベックを「新しい反動」の一人に数えたのは、以上のような経緯を背景としたものである。

2. 『秩序への回帰』と「新しい反動」論争

「新しい反動」という語はリンデンベルクが発明したものではない。先述のようにギー・スカルペッタの論考「新しい反動たち」（1999）はすでにこの語を用いていた。『ル・モンド・ディプロマティック』（2002年10月号）でもモーリス・T・マシノによる「新しい反動たち」という論考が掲載され、ここではよりジャーナリズム的に、権力に阿る同時代の知識人たちが批判されていた³⁵。さらに伝統あるカトリック左派の雑誌『エスプリ』（2001年11月号）では「批評の姿勢と欺瞞」という特集が組まれ、ここでも複数の作家・知識人が「新しい反動」の名のもと批判対象になった³⁶。

こうした先立つ動きにもかかわらず、「新しい反動」という語を爆発的に普及させたのはやはりリンデンベルクの『秩序への回帰』である³⁷。その時代背景として、2001年9月の同時多発テロ、および2002年の大統領選挙で極右のジャン＝マリー・ル・ペン率いる国民戦線が大躍進した事実（第一回投票でル・ペンは社会党のリオネル・ジョスパンを抑えて勝利、共和国連合のジャック・シラクと決選投票で争った）を挙げておく必要がある。内患外憂に揺れるフランスで、現状に対する知識人の責任（ないし背任）が取り沙汰されたのは想像に難くあるまい³⁸。

「新しい反動」——このやや撞着語法的な呼称は何を指すのか。これを論ずる論者たちは、語に明確な定義を与えるより、時代の空気として感じられる退行現象（バックラッシュ）の傾向をまとめ、それに名前を付けたという印象を受ける³⁹。とりわけ80年代以降の社会主義、左翼政治に対する失望

³⁴ Pierre Assouline, « Éditorial », *Lire*, n° 298, septembre 2001 ; n° 299, octobre 2001.

³⁵ Maurice T. Maschino, « Les nouveaux réactionnaires », *Le Monde diplomatique*, octobre 2002. 批判されたのはアラン・フィンケルクロート、ジャック・ジュリアル、フィリップ・ソレルス、アンドレ・グリュックスマン、リュック・フェリー、パスカル・ブリュクナーなど。

³⁶ Dossier « Postures et impostures critiques », *Esprit*, novembre 2001. 批判されたのはウエルベック、モーリス・ダンテック、フィリップ・ミュレ、ジャック・ブーヴレス、アラン・フィンケルクロートなど。この特集には同誌の編集に関わるリンデンベルクも加わり、シチュアシオニスム（ギー・ドゥボールを中心とする消費社会批判の運動）に関する討論を行っている。

³⁷ Daniel Lindenberg, *Le rappel à l'ordre : enquête sur les nouveaux réactionnaires* (2002), Paris, Seuil, nouvelle édition, 2016.

³⁸ この時の選挙でウエルベックは、ジャン＝ピエール・シュヴェーヌマン候補への投票を呼び掛けた。この政治家は、社会党出身だが反EU、国家主権主義、共和主義の立場を主張した。Michel Houellebecq, « Europe Endless », publié en ligne le 25 février 2002. なお、「二〇〇二年のフィリップ・ミュレ」で示唆されているように、反動と名指された書き手の一部はシュヴェーヌマンを支持した。『発言集』所収の「空、大地、太陽。」は、内容はまったく関わりないが、シュヴェーヌマン候補への支持表明として刊行された *Contes de campagne* (2002) に収録されている（私はこの著書を『田舎物語』と訳したが、この文脈では『選挙キャンペーンの物語』とでも訳されるべきであった）。同書にはフィリップ・ミュレやドミニク・ノゲーズも寄稿している。

³⁹ 「新しい反動」に関する以下の論集でも定義の困難を認めながら、そこには共通の「姿勢」が存在すると指摘する。Cf. *Le discours néo-réactionnaire : transgressions conservatrices*, Pascal Durand et Sarah Sindaco (dir.), Paris, CNRS Éditions, 2015. 同書にはドミニク・ラバテによるウエルベック論が掲載されている。

(社会党ミッテラン政権下における停滞、ソ連はじめ共産主義諸国における全体主義の波紋)、大衆社会の動向に対する危機意識(学校、郊外、移民の問題)、文化の停滞への批判(文学、哲学、知識人の「死」)を挙げることができる。こうした状況下で、社会学者、政治学者、作家を中心に、時代への失望を公然と語り、伝統や権威に基づく堅固な社会の再構築を構想する者たちが現われる。リンデンベルクによれば、彼らはポジティブな議論の特徴よりも否定の情念(パッション)、嫌悪において際立ち⁴⁰、批判対象は広範にわたる(大衆文化、社会風俗の自由化、知識人、六八年、人権主義、混血社会、イスラム、平等主義……)。そして著者は、こうした「反動的リビドー」を露わにする作家、思想家として、数多くの書き手を槍玉に挙げる。参考に名前を列挙しておこう。

アラン・バディウ(哲学者)、アラン・ブザンソン(歴史家)、クリスチャン・コンバ(作家)、ギー・ドゥボール(作家)、レジス・ドブレ(作家)、リュック・フェリー(哲学者)、アラン・ルノー(哲学者)、アラン・フィンケルクロート(哲学者)、マルセル・ゴーシェ(政治学者)、ギー・エヌベル(映画批評家)、クロード・ランズマン(映像作家)、ピエール・マナン(政治学者)、ジャン＝クロード・ミシエア(哲学者)、ジャック＝アラン・ミレール(精神分析家)、ジャン＝クロード・ミルネール(言語学者)、フィリップ・ミュレ(作家)、マルク＝エドゥアール・ナベ(作家)、フランソワ・リカール(作家)、アラン・ソラル(エッセイスト)、ピエール＝アンドレ・タギエフ(政治思想史家)、モーリス・G・ダンテック(作家)、ミシェル・ウエルベック(作家)

少し考えれば、ここに挙げられた全員が同じ傾向をもつとは考え難いし、挙げられた名前のなかには首を捻りたくなる人物もいる。本書はメディアで大きく取り上げられたが、批判者たちは真っ先に雑多な名前の混合(アマルガム)を指摘し、その人選にある種の利害関係を見て取った。とくに、同書が政治学者・歴史家であるピエール・ロザンヴァロンの監修する叢書「思想の共和国」(スイユ社)から刊行されたという事実は、この論争を裏で操るのは彼ではないかという勘繰りも生んだ(とりわけピエール・マナンやマルセル・ゴーシェなど、ロザンヴァロンと経歴的に近い学者は、これを仲間撃ちのように受け取った⁴¹)。とはいえ、「誰を反動主義者と認めるか」について客観的指標を挙げるのは困難に違いないが、フランスにおいて「反動的」と呼べる特徴の抽出において、同書はある程度成功しているのではないか。現代政治・社会・文化の領域で、人権思想や民主主義に批判的、さらには否定的な立場をとり、個人やそれに結びつくさまざまな属性(性別、性志向、人種、民族)の権利を相対化・軽視し、それを包摂すべきより大きな価値(国家や共和国、ときには共産主義と呼ばれる理念)への回帰を理想にしていると見なされるとき、「反動的」と呼ばれる傾向にある(繰り返しになるが、上に挙げられた書き手がこうした特徴を実際に有しているという意味ではない⁴²)。

⁴⁰ 「実際、タブーをすべて撤廃する偉大な花火師たる新しい反動たちは、議論よりも情念や嫌悪によって識別することができる。」 Lindenberg, *Le rappel à l'ordre*, op. cit., p. 19.

⁴¹ Jean Birnbaum et Nicolas Weill, « Ce livre qui brouille les familles intellectuelles », *Le Monde*, 22 novembre 2002.

⁴² 念のために言い添えておくと、反動とは右翼の専有物ではなく、「左翼反動」と呼ばれるものの歴史も存在する。Cf. Marc Crapez, *La gauche réactionnaire : mythes de la plèbe et de la race*, préface de Pierre-André Taguieff,

リンデンブルクの著書へのより積極的な反論は、そのように批判する進歩主義の左翼陣営自体が劣化している、という批判である。とくに「政治的正しさ」とそのフランス版というべき「単一思想⁴³」という語彙は、90年代以降の左翼の劣化を批判する上で常套句的に用いられる。コンセンサス的な正義、「みんな一緒」的な民主的画一主義に迎合する思想に対して、タブーを恐れない「自由な思考」が対置される。批判された側が連名で発表した「自由な思考のためのマニフェスト⁴⁴」では、政治的正しさに屈した順応主義的なインテリたちが、国民レベルで実感されている現実の問題（治安やアイデンティティなど）に目を塞ぎきれなくなったがために、その問題を指摘する論者を「反動」と呼ぶことで蓋をしようとしているのだと反駁する。民主主義は批判を糧として成長するものであるが、その批判に耳を傾けるのを拒否するのであれば、そうした進歩主義者は全体主義に陥るのではないか。政治思想史家のピエール＝アンドレ・タギエフはこうした観点から進歩主義陣営の劣化への精力的批判を展開し、それを「運動至上主義 *bougisme*」や「反・反動主義 *contre-réactionnaires*」と呼んだ上で、真の民主主義の側に立つのは自分たちだと主張した⁴⁵。こうした左翼批判はフランスにおいて一大市場を形成しており、六八年の革命的空気のなかで育まれた「絶対自由主義者 *libertaire*」が「自由主義者 *libéral*」の資本主義迎合的な陣営に無批判に転向したという、これ自体はある程度妥当性のある指摘に基づいている（ウエルベックの六八年批判もこうした左翼の劣化論に倣差すものである）。

さて、ウエルベックがこの論争にどう対応したかを確認しよう。『発言集』所収の「2002年のフィリップ・ミュレ」と「保守主義は進歩の源泉」は、いずれも保守系新聞『フィガロ』に掲載された2002年の文章で、論争当時のウエルベックの反応を証言している。一つ目の「2002年のフィリップ・ミュレ」（掲載時タイトルは「左翼は道を外れている」）は、やはりリンデンブルクの著作に見えるごた混ぜ（アマルガム）を批判しながら、そのレッテル貼りがかえって論争以前にはバラバラだった書き手たちに集団としての自覚を与え、「フランスの第一の知的な力⁴⁶」になる結果を招いたとして、逆効果を皮肉っている。この揶揄は、先述のピエール・ロザンヴァロンや、論争を積極的に取り上げた『ル・モンド』編集長のエドウィ・プレネル、さらには掲載紙の『フィガロ』にまで向けられ、ウエルベックの面目躍如たるところがある。とはいえ、そうした切れ味を除けばこの論考は、アマルガム批判と左翼の劣化批判という、他の論者たちの論点をほぼ踏襲したものと言える。

これに対して第二の論考「保守主義は進歩の源泉」はもう少し真面目に議論している。彼はまず、「新しい反動主義者」が存在するなら「新しい進歩主義者」も存在するはずだと言い、タギエフを援用しながら後者を「運動至上主義者」と呼ぶ。スカルペッタが「新しいものへの体系的な憎悪」を反

Paris, Berg International Editeurs, 1997.

⁴³ 『木曜の事件』誌や『マリアンヌ』誌の創刊者であるジャン＝フランソワ・カーンがこの語を造ったとされる。

⁴⁴ « Manifeste pour une pensée libre », *L'Express*, 28 novembre 2002. 署名はA・フィンケルクロート、M・ゴーシェ、P・マナン、P h・ミュレ、P-A・タギエフ、シュミュエル・トリガノ、ポール・ヨネ。

⁴⁵ Pierre-André Taguieff, *Résister au bougisme : démocratie forte contre mondialisation techno-marchande*, Paris, Fondation du 2 mars, 2001 ; *Les contre-réactionnaires : le progressisme contre illusion et imposture*, Paris, Denoël, 2007.

⁴⁶ Houellebecq, *Interventions 2020*, op. cit., p. 234. 『発言集』前掲書、174頁]

動主義者の特徴としたことへの意趣返しのように、運動至上主義者の特徴は新しいものなら何でも無条件に礼讃する態度だとされる。この戯画的な進歩主義者の肖像に対して、新しい反動主義者は「新奇性に原則的な抵抗を示す、一種の気難し屋⁴⁷」と呼ばれる。いずれの立場も、「良いものは受け入れ、悪いものは拒む」という良識の立場から外れていると言われるが、進歩主義者がこの戯画的イメージから抜け出さないのに対して、反動主義者（彼は保守主義者と呼ぶことを好む）には好意的なニュアンスが与えられる。一種のエコノミー的な議論（最小努力の法則）を前提にしながら、保守主義者とは「知的に怠惰」で、必要な時にしか動こうとしない存在、だが必要とあれば変化を受け入れる存在として、感じよく説明されるのだ。ここでウエルベックが反動の問題を取り扱う際、それを政治的立場というより経済的原則の問題として認識していることに注意しよう。それは生命や物質の運動エネルギーの保存・管理に関わる節約術である。ウエルベックは過剰な運動によるエネルギーの散逸を嫌い、できるだけ静止状態に置くことを好む。こうした保守の原理を「政治の世界に翻訳する」ことは、可能であっても困難で、「政治的であることは二の次だ」と彼は言う⁴⁸。

最後に、哲学者ベルナール＝アンリ・レヴィとの往復書簡による共著『公共の敵』（2008）を参照しよう。2008年3月24日の書簡で彼は、思想家のフィリップ・ミュレを参照して、「保守主義は進歩の源泉」では曖昧だった保守主義と反動主義の区別を強調し、その区別に基づくかぎり自分は反動主義者ではないと言う。長くなるが引用しよう。

反動とは社会組織の以前の状態を好ましいと考え、その状態に戻ることが可能だとし、そのために活動する者を言う。ところで私の全小説に通底する一箇の思想、時には強迫観念ともなる唯一の思想があるとするならそれは、ひとたび始まった劣化のプロセスは絶対に取返しがつかないというものである。その劣化が友情、家族、カップル、より大きな社会集団、社会全体に関するものであれ。私の小説には赦しは存在しない。元に戻る可能性、二度目のチャンスはない。失われたものは、まったく完全に失われてしまったのだ。それは有機的という以上のもの、生命の

⁴⁷ *Ibid.*, p. 246. [同前、182 頁]

⁴⁸ *Ibid.*, p. 247-248. [同前、183-184 頁] この点に関して、いくつか補足しておきたい。(1) 運動量をできるだけ低く抑えるこの経済原則は、彼が六八年五月革命当時の経験を語った小文「停止した動きの美学」にも見出される（同前、34-37 頁）。当時少年のウエルベックは五月革命時、ストや反乱で社会機能が停止した状態に喜びを感じたと語る（「どこまでも平和で、沈黙は完璧だった。素晴らしい瞬間だった」）。そこで彼が称揚する「クールな革命」とは、革命とは沸騰状態の運動であるという通念に反して、一切の運動の停止により到来するものであり、根本的に「反運動的」なウエルベックを示唆する。(2) フランス革命以来、革命は運動の側に位置づけられ、反動は不動、静止の側に位置づけられてきた。とはいえ、革命を運動ではなく停止と考える思想は、これも反近代的な思想家であるベンヤミンにも見出せるもので、70 年代以降の左派の議論に大きな影響を与えている。その停止（歴史の終わり）はメシア的または恩寵的な瞬間であり、ウエルベックにこうした恩寵への期待を探すのは難しくあるまい。(3) ウエルベック自身は、『垂直』誌との座談において、「あなたにとってすべての運動は悪化を意味するのか」という問いに次のように答えている。「それは違う。だが欲望に対する私の嫌悪とこの話を連結させるための唯一の可能性は、根本的に私がユートピア主義者で、歴史の運動は運動の不在に到達すべきだと考える人々に与している、という点にある。歴史の終わりは私にとって望ましいものだ。しかし歴史の運動のすべてが後退だというわけではない。」Houellebecq et al., « Je crois peu en la réalité », art. cit., p. 8.

ない事物にまで適用される宇宙の法則の如きもので、文字通りにエントロピー的である。このように退廃や喪失は性質上不可避だと確信している者に、反動などという考えは訪れようがない。彼が反動的だということはあり得まいが、それに対して、彼が保守的になるのはまったく自然なことだろう。新しい実験に打って出るよりも、現存するもの、良し悪しはあれど機能しているものは保持した方が良く、といつも考えるだろう。希望よりも危険に対して敏感な彼は、悲観を本性とするペシミストだろうし、その方が一般的に生きやすいのだ。⁴⁹

ここでも作家はエントロピーを持ち出し、保守や反動という政治的カテゴリーを熱力学的に考察する。彼による反動と保守の区別を確認するなら、反動とは過去の状態への回帰を目指す、保守は現在の状態をできるだけ温存すべきと考える態度を指す。だが、ウエルベックの反動の定義の内、「社会組織の以前の状態を好ましいと考え」ることは反動の必要条件だとして、「その状態に戻ることが可能だし」、「そのために活動する」ことは必須の条件だと言えるだろうか。過去の望ましい状態を望ましく思い、そこから逸脱していく現在に対して呪詛の念を吐くが、具体的には行動しない（または「書く」という行動しかしない）というのも、立派な反動的態度ではないか⁵⁰。ウエルベックがそうしたノスタルジーに浸る人間かと言えば本人は否認するかもしれないが、家族や愛や秩序など、もっぱら六八年五月革命以降に破壊されたという「失われた価値」へのノスタルジーと読める記述は稀ではない。

とはいえ、彼の反駁をもっと正面から受け取ることは可能だろう。いずれにせよ彼は反動のレッテルを拒否して、「現在あるものを保存する」立場として保守主義の屋号を選択する。それに、ウエルベックはそこまで過去主義者だろうか。しばしば近未来 SF 的な仕掛けを用いる彼の小説において、過去への追慕は、未来への希望によって贖われるのではないだろうか。ウエルベックの友人でもある作家ドミニク・ノゲーズは「ウエルベック的な天国は私たちの背後にではなく手前に存在する⁵¹」と述べていた。この点はウエルベックの小説上の仕掛けの問題、とりわけ小説の結末の問題に関わってくるものであるから、次節で検討することにしよう。

3. 小説に「作者の思想」は存在するか？

ここまで、ウエルベックと「反動」をめぐる問いについて、社会情勢やエッセイをもとに議論してきた。だがウエルベックが作家であるかぎり、反動の問いはフィクションと思想の関係の問題として提出されるべきはずである。リンデンベルクの著書はこの問題を回避し、小説の登場人物や語り手の発言・思想を作者に直結させた点に欠点があるが⁵²、多少なり真剣にウエルベックを読もうとするな

⁴⁹ Michel Houellebecq et Bernard-Henri Lévy, *Ennemis publics*, Paris, Flammarion, Grasset, 2008, p. 118-119.

⁵⁰ たとえばマーク・リラが『反動の精神』で扱う思想家たちは活動家ではなく、リラが彼らの内に探るのも「政治的ノスタルジー」の力である。Mark Lilla, *L'esprit de réaction*, op. cit. [『難破する精神』前掲書] なお、同書ではウエルベックの『服従』が扱われ、この小説では「強い家族、道徳教育、社会秩序、帰属感情、死の意味、文化としての持続意志」といった前近代キリスト教の特徴がイスラムに投影されているとする。

⁵¹ Dominique Noguez, *Houellebecq, en fait*, Paris, Fayard, 2003.

⁵² たとえば彼は『プラットフォーム』を「根本的に反第三世界的な小説」と評するが、その理由を説明してはいない。Lindenberg, *Le rappel à l'ordre*, op. cit., p. 37.

ら、問題となる発言・思想がフィクションを通じて表現されているという事実に衝突せざるを得ない。登場人物の発言はどこまで作者のものなのか？ 語り手と作者の間に見解の一致は存在するのか？

この問いに対する一番わかりやすい解決策は、ウエルベックを小説中の記述だけから批判せず、インタビューやエッセイの内容と「照合」して裏付けることである。すでに確認してきたことだが、最初に論争に臨んだ『垂直』誌は小説『素粒子』だけをもって作者ウエルベックを反動的と批判したのではなく、インタビューに見える作家の言動と作中に表明される思想を照らし合わせ、さらに本人に直接、「君はどこまで登場人物と同じ見方をしているのか⁵³」と問い質すことで、一致の度合いを確かめようとしていた。『ル・モンド』への寄稿で彼らは次のように書く。「ウエルベックが『垂直』誌（11号）で述べた発言は単なる挑発だとまだ信じるふりをしている人たちには、『即刻』誌のこの号を読むことを勧めたい。そこで作家は教皇との完全な見解の一致を言い、「自由という語には否定的な意味しか与えられない」と発言している⁵⁴。さらに、『プラットフォーム』を批判したピエール・アスリーヌが「ミシェル〔登場人物〕とウエルベック〔作者〕はまったくの同一人物である⁵⁵」と述べたのは、やはり『リアル』誌に掲載されたインタビューをもとにしてのことだった。

このように文学テキストとインタビューでの作者の発言（エピテキスト）を照合させる作業に加え、作品内部での作者の戦略を検討する場合には、「テーゼ小説」の問題に逢着するはずだ。テーゼ小説とは、何らかの主張（テーゼ）に向けて組織された小説の謂いであり、モーリス・バレスの『デラシネ』（1897）のように、19世紀末から20世紀前半にかけて思想小説や哲学小説が隆盛するなかで確立されたジャンルである。これを検討したスーザン・ルービン・スレイマンの議論に依拠するなら、テーゼ小説とは、ある主張の正しさ（あるいは誤り）を証明するために物語を「範例 *exemplum*」として用いる語りの仕組みである⁵⁶。フィクションにおける権威者としての作者は、読者が物語を解釈する上での多義性をできるかぎり削ぎ落とし、作者の望みどおりの解釈に読者が向かうよう仕向ける。注意しておきたいのは、小説とは「語り手」、「登場人物」、そしてそれらと区別される「作者」という少なくとも三つの声が混在する本来的に多声的（ポリフォニック）な装置であり、テーゼ小説とはこの小説の多義性をどれだけ一義的に「還元」するかという作者の戦略に由来するということだ。この意味で、読者が作中にテーゼを検出するからといってポリフォニー自体が否定されるわけではない。こうした戦略の例としてスレイマンが挙げるのは「冗長性」であり、これは同じ方向に解釈できる複数のエピソードを繰り返し（冗長に）提示することで、読者を回避不可能なひとつの結論に導く装置として理解される⁵⁷。

⁵³ J.-Y. J. 「君の小説の登場人物は問題がありスキャンダルになるかもしれない思想を表明している。政治的な見方や、人種主義や、排除などに関して。君はどこまでこうした立場を共有しているのか？」
M. H. 「いや彼らには政治的な見方なんてないんだ。そんなこと彼らにはどうでもいいんだよ。[...]」
Houellebecq et al., « Je crois peu en la liberté », art. cit., p. 108.

⁵⁴ Revue Perpendiculaire, « Houellebecq et l'ère du flou », art. cit.

⁵⁵ Pierre Assouline, « Éditorial », art. cit.

⁵⁶ Susan Rubin Suleiman, *Le roman à thèse ou L'Autorité fictive* (1983), Paris, Classiques Garnier, 2018. 日本語では「テーマ小説」、「主題小説」、「問題小説」などと訳されるが、本稿では「テーゼ小説」という語を用いる。

⁵⁷ 「テーゼ小説のレトリックとは、テキストのあらゆる水準で冗長性を重ねていくことで、多様な読み方を可能にするテキストの「綻び」を最大限まで還元することにある、と考えることができる。」 *Ibid.*, p. 65.

初期のウエルベック批判者たちは、『素粒子』や『プラットフォーム』をこうしたテーゼ小説の枠組みから理解してきた。作者と語り手や登場人物のあいだの同一性を素朴に前提しているのは批評家ではなく作家自身だ、というわけだ。たとえば『アート・プレス』のフィリップ・フォレストの論考は、「とくにウエルベックの場合のように、テーゼ小説の自然主義的伝統（社会の見取り図は人間についての疑似科学的な概念に依拠し、それを基礎として全体化的な狙いをもつ哲学的・政治的証明を展開する）を明白に引き受けそれに属しているとき、作品がその意味作用に責任を負う必要がないとは考え難いだろう。実際のところ、ウエルベックを読もうとしない態度とは、その発言の明白で一貫した意味を理解しようとしめない態度のことだと言えよう⁵⁸」と述べ、『素粒子』とは『デラシネ』（テーゼ小説の典型）の性的バージョンだと評する。マリー・ルドネの論考も、『素粒子』の構成（異父兄弟のブリュノとミシェルが失望の連続を経て人生や欲望から逃れることを望む）は「小説より前に存在するテーゼのために利用される道具にしかになっていない⁵⁹」と批判する。要約的に述べるなら、これら二つの論考は、『素粒子』を自然主義の伝統に位置づけ、その小説的なモダニズムとの隔たりゆえに、ウエルベックは政治的に反動である以前に美的に反動的であり、美的に反動的であるがゆえに政治的に反動であるという主張を展開している（これは『アート・プレス』のようなモダニズム的な芸術観を奉ずる雑誌においては納得のいくことである⁶⁰）。

これらの論考から数ヶ月後に登場したギー・スカルペッタは、『素粒子』がテーゼ小説だという点について、断定ではなく検証を試みる⁶¹。論証は以下のように進む。（１）同書にはいくつかの「思想」が存在する（諸悪の根源としての五月革命への批判、欲望やセクシュアリティへの憎悪、ピルや中絶への反対、規範的な家族秩序へのノスタルジー、時代への批判、再生する人類への夢想など）。（２）同書はアレゴリー的で、描かれる状況や行動はこれらの思想の例示になっている（登場人物ブリュノの失望に次ぐ失望など）。（３）物語は科学的「説明」に従属する。欲望や快楽についての疑似生物学的な説明は、語り手のビジョンに「客観的」な保証を与える。（４）「思想」はしばしば登場人物の口を通じて発されるが、それに対立する思想を提示する登場人物がいない。作中にアイロニーは欠けていないが、主張の断定的性質を疑問視するほどではない。そしてそうした思想はウエルベックがエッセイなどで言うことと同一である。したがって、疑問の余地はない。これはテーゼ小説なのであり、反動的プロパガンダの効果を有している。Q.E.D.

以上の二点（作家の公的な言動との照合と、テーゼ小説としての読解）は、ウエルベックの作品に作者の思想を読み取るために、頻繁に用いられる手続きである。ほかにも、自伝的要素との照合（登場人物の名前や経歴の部分的一致など）や、間テキスト性を用いた推論（複数の作品に跨る思想を作

⁵⁸ Philippe Forest, « Le roman, le rien », art. cit. p. 53.

⁵⁹ Marie Redonnet, « La barbarie postmoderne », art. cit., p. 60.

⁶⁰ 次段落で扱うスカルペッタの主張が、この点を要約している。「ウエルベックの小説は、まずもって美的に後退的でなければ、イデオロギー的に反動的にはならなかっただろう。」（Guy Scarpetta, « Les Nouveaux réactionnaires », art. cit., p. 56.）

⁶¹ *Ibid.*, p. 55-56.

者自身のものとして推論する)を挙げることできる。このため、初期のウエルベック批評・研究は、こうした批判に応答する必要があった。ウエルベックを扱った最初の単著『ウエルベック、その実態』(2003)で、作家のドミニク・ノゲーズは前年に刊行された『秩序への回帰』に応答する形で「ウエルベックは反動か」と問うている⁶²。そもそもノゲーズ自身が、スカルペッタにより「新しい反動」の一員として数えられていたことを指摘しておこう。彼はリンデンベルクの理論的枠組みが脆弱であることを(スタロバンスキーの『作用と反作用』を挙げつつ)批判し、そもそもウエルベックは分類不可能で、政治的に正しい考え方に与さない自由な考えの持ち主なのだと強調する⁶³。左翼思想の硬直化に対する自由な思考の自律という論点は、論争直後の「自由な思考のためのマニフェスト」に見られた戦略の延長線上にあるものとして理解できる⁶⁴。

2004年には作家に捧げられた最初の学術論集『ミシェル・ウエルベック』が刊行されたが、そこに収録されたリーズベス・コルトハルス・アルテスの論文「ポストモダンのテーゼ小説における説得と両義性(『素粒子』)」は、より学術的な観点から『素粒子』=「テーゼ小説」という見方を検証する試みである⁶⁵。タイトルが示唆するように、彼女は『素粒子』をポストモダンのテーゼ小説と位置付ける。同作品のいくつかの特徴は、これがテーゼ小説だという印象を強める、と彼女はまず認める。作品の構成(プロローグとエピローグを挟む枠構造、クローン人間を語り手とする語り、ブリュノとミシェルという登場人物の反教養小説的遍歴)、さらに語り手や登場人物による現代社会をめぐる会話(しばしばモノローグ的で反論が存在しない)、などの特徴である。だが、他方で作品における声の不安定さ(語り手が単一の声に回収されない)、パロディや不条理の効果によるテーゼの相対化、そして最後に作品内に流通する特殊なイメージなどは、テーゼ小説が目指す一義性への還元がウエルベックにおいて不発に終わることを示す。この論考は、ウエルベックをテーゼ小説という批判から擁護するため、積極的に引き合いに出されるもののひとつである。

だが、コルトハルス・アルテスの議論がどこまで説得的であるかは検討の余地がある。彼女の分析は『素粒子』全体を射程に据えたものだが、とりわけ彼女が両義的なテーゼとして分析するのは作品の結末で「決定的解決」として提示される「人類の消滅とクローン人間の時代の到来」である⁶⁶。しかし、ウエルベックの作品には登場人物や語り手によって表明される複数のテーゼが存在し、そのなか

⁶² Dominique Noguez, *Houellebecq, en fait, op. cit.* p. 235-257. ノゲーズは『アート・プレス』にスカルペッタの論考が掲載されたときにも反論(というよりその主張への嘲笑)を発表している。Voir *ibid.*, p. 158-160.

⁶³ 彼によればウエルベックの立場とは「良識的思考や政治的正しさに対立する、率直な物言い(悪識的思考? 必ずしもそうではないし、完全にそうとも言えない。もしくはこの言葉を新しく定義する必要がある)の信奉者」である。Ibid., p. 255.

⁶⁴ 作家、ジャーナリストのクリスチャン・オティエ(彼によるウエルベックへのインタビューは『発言集』に収録されている)も著書『政治的ウエルベック』でこの結論を踏襲し、左翼の劣化への批判を織り交ぜて展開している。Christian Authier, *Houellebecq politique*, Paris, Flammarion, 2022.

⁶⁵ Liesbeth Korthals Altes, «Persuasion et ambiguïté dans un roman à thèse postmoderne (*Les Particules élémentaires*)», dans Michel Houellebecq, Sabine van Wesemael (éd.), Amsterdam - New York, Rodopi, 2004, p. 29-45.

⁶⁶ 論文の結論部を参照しよう。「同作品『素粒子』の挑発とは、それがまさに、きわめて字義通りの仕方です。さえ「決定的解決」を提案する点にあるわけだが、ただそれも両義的である。哲学的問題がその前提・解決策と一緒に「上演」され、この挑発的かつ両義的なレトリックが読者の腕いっぱい「テーゼ」と相矛盾する感情を持たせる。そこにこの小説の認知的かつ倫理的な可能性が存在するのだ。」Ibid., p. 44.

にはアイロニーにより両義的に示されるものもあれば、そうしたアイロニーの対象にほとんどならず、背後に著者自身の思想を窺わせるものもあり、その都度テーゼがどのように提示されているかの検討を要するようになる。ここでは仮説として、それを「消極的・否定的テーゼ」と「積極的・肯定的テーゼ」に区別してみよう。前者は、現状や時代に対する否定・否認・批判の形で展開されるテーゼであり、最大公約数的に表現すると「西欧世界における愛（人間関係）の不可能性」テーゼと呼ぶことができる。これに付随する形で、そうした愛の消滅に責任ありとされる六八年世代や自由主義思想への非難、精神分析やフェミニズムがそれをさらに後押ししたことへの難詰などのサブ・テーゼが挙げられる。これに対して、後者の「積極的・肯定的テーゼ」は、そうした現代西欧世界の閉塞に直面して、物語がもたらす一種の「想像的解決」（フレドリック・ジェイムソン）である。これは小説の結末に現れるもので、『闘争領域の拡大』であれば人間社会を離れ森のなかに逃げ込むこと、『素粒子』であればクローン人間の到来、『プラットフォーム』であれば非西欧世界への旅立ち、といった形をとる。だが、これらいずれの「解決策」も両義的な仕方では提示されておらず⁶⁷、この点でコルトハルス・アルテスの分析は妥当だろう。これに対し、先に「消極的・否定的テーゼ」と呼んだものは、アイロニーや不条理の効果によって歪められることの少ない、真正のテーゼを形成しているように思われる。三つの例を挙げよう⁶⁸。「目下、世界が画一に向かっている。通信手段が進化している。住居の中が新しい設備で豊かになっている。徐々に、人間関係がかなわぬものになっている。」（『闘争領域の拡大』）「一九七四年から七五年にかけて、西欧社会は微妙でしかも決定的な転換期を迎えていたんだなとブリュノは思った。[...] 個人主義化の完璧な表れである肉体的暴力が、欲望の帰結として西欧にふたたび登場しようとしていた。」（『素粒子』）「西欧において人と人との関係はずっと難しいもの——実に嘆かわしいものになってしまった……」（『プラットフォーム』）。「西欧世界における愛（人間関係）の不可能性」というテーゼは、作中で反駁の余地なく展開されるだけでなく、ウエルベック作品のブランド印として間テクスト的に散りばめられる。登場人物は愛の可能性を求めて絶望的に抵抗するが、たえず挫折する。エッセイにおいても、この悲観は表明される。「認めざるをえませんが、私の生きている社会は、私の見ている方向とは別の方向に向かっています。西洋は人間が生きるためにはできていません。じっさい、西洋でひとが本気でやれる唯一のことは、金を稼ぐことです⁶⁹。」読者は、こうした合致から、このテーゼが作者自身のものだとして一定の説得力をもって解釈することができる。

では、こうしたテーゼはどのような舞台装置によって上演されているだろうか⁷⁰。たとえば『素粒子』第二部第十五節には、先にも挙げたようにブリュノによる次の発言が見られる。「九〇年代の（連続殺人犯）は六〇年代（ヒッピー）の私生児なんだ。[...] チャールズ・マンソンはヒッピーから

⁶⁷ ここでは『闘争領域』の例だけ挙げるが、自然との調和的融合を目指した語り手は「崇高な融合なんて起こらない」ことを間もなく確認する（『闘争領域の拡大』前掲書、202頁）。

⁶⁸ 順に、EDL, p. 270. [『闘争領域の拡大』前掲書、22頁] PE, p. 712. [『素粒子』前掲書、210-211頁] PF, p. 276. [『プラットフォーム』前掲書、312頁]

⁶⁹ Houellebecq, *Interventions 2020*, op. cit., p. 199. [『発言集』前掲書、147-148頁]

⁷⁰ ここで「舞台装置」という語は、近年物語論や言説分析の領域で用いられている scénographie の訳語として用いる。Cf. Dominique Maingueneau, *Discours et analyse du discours* (2014), Paris, Armand Colin, 2e édition, 2021.

逸脱した化物ではいささかもなく、むしろその論理的達成なんだ⁷¹」。ここでブリュノは、ダニエル・マクミランという（現実世界には存在しない）アメリカ州検事の著書『欲望から殺人へ——あるジェネレーション』（仏訳『殺人ジェネレーション』）の主張を要約している。本節自体が「マクミランの仮説」という副題をもち、この仮説の開陳を中心的な関心としている。この意味で、これはブリュノ自身の見解ではないが、彼はこの著書を「十分な調査資料に基づく明快な書物」だと評し、引用に基づく客観性を担保しながら、クリスチャーヌを相手に独白的な長台詞でこれを説明しているため、その見解への同意は明確である。彼がこの主張を説明し終えたあとにも、聴き手役のクリスチャーヌによる発語は一切記述されず、この主張を相対化する登場人物は存在しない。ブリュノが話を終え沈黙したあとの様子は語り手が記述するのだが、連続殺人犯の生みの親としての責任を負わされた「ウィーン・アクションリスト」の担い手の一人の死に言及し、「こうして、この世から悪の源が一つ消える」と記している。ただし、これは条件法で語られており、語り手自身が前衛芸術家を「悪の源」だとする見解を自分のものとしているかどうかには、両義性が残されている。しかし、こうした甚だ簡素な分析によっても、この節の全体的な方向は明白である。信頼に足る文献の引用、登場人物の賛同、反論の不在、語り手の追従などを通して、マクミランの「仮説」の真実性はテクスト的に立証され、一つの「テーゼ」に昇華してゆく。

とはいえ、こうした「消極的テーゼ」は、果たしてテーゼと呼ぶに相応しいものなのか、という疑問が生ずるかもしれない。テーゼとは何かしら積極的・肯定的であるがゆえにテーゼと呼ばれるのではないかと。だが、さらに一般的な考察を進めるなら、ウエルベックはそうした積極的・肯定的なテーゼを立てることの困難さ、ひいては不可能性をこそ、逆説的にも彼自身のテーゼとしているのではないかと。この意味で先に「積極的・肯定的なテーゼ」と呼んだものの両義性、つまり小説の終わりにまったき肯定的結末を見通すことの難しさは、その不可能性の印象をより強化することになる。そして「不可能性」という消極的・否定的な形でしかテーゼを語れないことは、ウエルベックにおいて（テーゼ小説に不可欠な契機としての）「説得」の形として機能する。ここでもインタビューの発言を引用しよう。

私は実際にはニヒリズムの作家で（ニーチェの意味でのニヒリズムです）、ここにはいかなる疑点もありません。つまり、私はニヒリズムの時代の作家であり、しかもニヒリズムに結びついた苦痛を記す作家なのです。それゆえに、人々は私の作品を読むと恐怖に後退りし、何らかの信仰へと跳びこんでいくのでしょうか……。こう言ってよければ、あれほど見事に描かれたニヒリズムから逃れるために。だからそうです、神なき世界の恐怖を説明するという意味において、私はカトリック教徒です……。しかし、その意味においてのみです。⁷²

⁷¹ PE, p. 781 [『素粒子』前掲書、289-290 頁] この段落での引用はすべて当該箇所から行われる。

⁷² Houellebecq, *Interventions 2020*, op. cit., p. 360. [『発言集』前掲書、274-275 頁]

ここでウエルベックはパスカルの「神なき世界の悲慘」を参照している。ところで、パスカルの『パンセ』は護教論、つまりキリスト教における神の真理を証明し、非信徒を説得し信仰に導くための書として構想されたが、そのためにパスカルが用いた説得方法は、神の存在の証明ではなく、神が不在であることがどれほど惨めで辛いことかの強調であった。上の引用でウエルベックも認めるように、彼によるテーゼの論証・説得の仕方にも、これに通じる点を見ることができる。作品のなかには「神なき世界の悲慘」のヴァリエーションとしての「西欧世界における愛（人間関係）の不可能性」（消極的なテーゼ）が描かれ、その終末的情景が引き起こす恐怖が読者を回心に導く。その意味で真に積極的なテーゼ（「何らかの信仰」への回心の可能性⁷³）は、あくまで暗示的な仕方では示されず、テキストの外部、読者の側にしか存在しないことになる⁷⁴。パスカルは青年ウエルベックに最も甚大な影響を与えた思想家の一人であるが、この意味でウエルベックを（パスカルを含む）「ポール・ロワイヤル派の作家」と呼んだ『即刻』誌の同人たちはあながち的外れではなかったと言えよう⁷⁵。

テーゼ小説に不可欠な「説得」の方法に関わるこうした仮説を提示することで、反動に関する議論から遠のいたような印象を与えてしまったかもしれない。だが『垂直』誌とのインタビューでウエルベックが反動を二種類に分け、「伝統主義的なカトリック」の反動を「感じが良い」と評していたことをあらためて想起したい。ことウエルベックと反動思想の関係を考察する上で、カトリシズムとそれが提示する精神的権威に基づく共同体の問題は避けて通れないものだ。とはいっても、こうしたニヒリズムや悲観主義を政治的な反動性とイコールにして考えることも困難だ。ドミニク・ラバテも述べるように、ウエルベックの作品において「政治的・イデオロギー的なメッセージはかなり漠然としており、本当の意味で把握することは難しい。というのもまず、そうしたメッセージは大量の悲観的で皮肉なテーゼによって圧倒されているように見えるからだ [...]」⁷⁶。反動という語を用いるとして

⁷³ この「何らかの信仰」はカトリックの信仰に限られまい。現代科学、イスラム教、愛、あるいは文学への「信仰」も可能である。たとえばアガト・ノヴァク＝ルシェヴァリエはウエルベックにおける「慰めの技法」に関して次のように述べる。「哲学的慰めの基盤が崩壊し、宗教の約束が欠如し、空虚の拡大が私たちを飲み込みまんとするとき、唯一残る慰めとは文学である。」（Agathe Novak-Lechevalier, *Houellebecq, l'art de la consolation*, Paris, Stock, 2018, p. 153）ところで、著者は同書前半でウエルベックを特定のテーゼやレッテル（鬱病主義、シニシズム、ニヒリズム、反動、ミソジニー……）に回収することの困難・矛盾を論じ、フィクションとエッセイを混同しないように戒めていた。だが、同書を読むにつれ、ウエルベックが小説（フィクション）というより「慰めの書」（エッセイ）を書き、「文学こそ唯一の慰めである」という主張（テーゼ）を展開しているような印象を受けてしまうのは、単なる逆説という以上に、小説とエッセイの境界自体がウエルベックにおいて問題になることを証明してはいないだろうか。

⁷⁴ カトリック作家のフランソワ・モーリヤックは風俗小説家のコレットを、彼女の作品は神なき人間の悲慘さ、肉体の虚しさを浮かび上がらせるがゆえに、ひとを不可避に神に導くという逆説的な称賛を送っていた。「たとえ宗教的精神をまったく持ち合わせておらずとも、彼ら〔世俗の作家たち〕はパスカルが「神なき人間の悲慘」と呼んだものを、望むと望まざるとにかかわらず描いているのだ。」François Mauriac, *Le Roman* (1928), dans *Œuvres romanesques et théâtrales complètes*, II, édition établie, présentée et annotée par Jacques Petit, Paris, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », 1979, p. 756.

⁷⁵ 「ミシェル・ウエルベックに関して、[...] 私たちの立場は決まっている。彼が苦しみを詩の原動力とする仕方、「極めて神聖な罪悪感」に与える位置づけ、そして世界への軽蔑は、ミシェル・ウエルベックをポール・ロワイヤル派に置くものである。」« Il ne s'est rien passé... », art. cit., p. 69. なお、ウエルベックと信仰の問題をテーマにした論集も『神なき人間の悲慘』と題された。Voir *Misère de l'homme sans dieu : Michel Houellebecq et la question de la foi*, Caroline Julliot et Agathe Novak-Lechevalier (dir.), Paris, Flammarion, 2022.

⁷⁶ Dominique Rabaté, « Extension ou liquidation de la lutte ? Remarques sur le roman selon Houellebecq », dans *Le*

も、そこには政治的意味より、まずは倫理、道徳的、精神的な意味が強いものに思われる⁷⁷。

最後に、もうひとつの点を検討しよう。つまり、登場人物の主張はどこまで作者の主張であるのか、という問題に対して、作者のインタビューなどでの発言と照合するという手続きについてである。これは訴訟沙汰に発展した『プラットフォーム』を中心に論じられる論点で、この点では文学社会学者のジェローム・メゾの論文が参照文献になる⁷⁸。彼は『プラットフォーム』が引き起こした文学スキャンダルについて、19世紀以降の文学裁判の事例も参照しながら論じる。ここでメゾも、同書がイスラムに関してテーゼ小説に典型的な手法を用いていることを認める。(1) 反イスラムというひとつのテーゼにすべてが向かう、(2) 反論者が十分な一貫性を見せることなく、複数の登場人物(アイーシャ、エジプト人生物学者、ヨルダンの銀行家)が同趣旨の主張を行い、語り手はそれに反論しない、(3) 理論的な後ろ盾(ヴォルテール、ショーペンハウアー)が間テクスト的に援用される、(4) 語り手のイデオロギー的機能がこのテーゼを支えている。だが、コルトハルス・アルテスの議論と似た方向で、著者はそこにテーゼ小説そのものではなく、その「風刺的パスティーシュ⁷⁹」を見出す。だがメゾの論文の利点はテーゼ小説に関する議論ではなく、こうした登場人物の発言から浮かび上がってくるテーゼと、インタビューにおける作者の反イスラム的な発言が酷似しており、小説の登場人物と作者の思想上の一致という仮説が強化されるように思える、という点を正面から考察した点にある。『プラットフォーム』の論争を紹介したときに比較引用したように、『リール』誌でのウエルベックの発言は、作中の登場人物三人(アイーシャ、エジプト人生物学者、ヨルダン人銀行家)と語彙レベルで一致している。作者は、彼自身の思想を登場人物に語らせ、代弁させているのだろうか。こうした問い、そしてその問いにイエスと答えるピエール・アスリーヌらの批判(「ミシェルとウエルベックは同一人物である」)に対して、メゾは「論争が起きたのは、作者の機能が、登場人物や語り手の見解を踏襲した⁸⁰」ためだと解釈する。ここでは転倒が生じている。つまり、登場人物が作者の思想の代弁者になっているのではなく、作者が登場人物の見解を後追いの踏襲している、という転倒だ。こうした作者による登場人物の踏襲によって作者／語り手／登場人物の区別を意図的に危機に晒しているのは、読者ではなく作者の側である。この点をメゾは、「フィクションの免疫」という興味深い比喻で説明する。

dicours néo-réactionnaire, op. cit., et repris dans Petite physique du roman, Paris, Éditions Corti, 2019, p. 261.

⁷⁷ ヴァンサン・ベルトリエは「ウエルベックの「反動」(反抗的というより諦念的であるが、これは珍しいものではない)とは、政治的である以上に倫理的なものである」と論じる。だが、反動的という形容自体を拒否するわけではない。「ウエルベックを反動的と形容したくさせるのは、デビュー作『闘争領域の拡大』

(1994)以来その作品に含みこまれているように、彼の反リベラリズムが反動的なイデオロギー素に由来しているという点である。つまり、権威による強制は、それ自体としては保護者の役割を果たしてくれるということだ(庶民の庇護者を夢見る貴族、という貴族的ファンタズムの残滓)。」Vincent Berthelier, *Le style réactionnaire. De Maurras à Houellebecq*, Paris, Éditions Amsterdam, 2022, p. 351.

⁷⁸ Jérôme Meizoz, « Le roman et l'inacceptable... », art. cit., p. 181-209.

⁷⁹ 「「テーゼ」が存在するとして、それを真剣に読むべきなのだろうか。複数の手がかりから、距離を置いた読解の方が求められる。批判内容のこれみよがしの冗長性、超古典的な論証方法への大げさな依拠、そして語り手の強烈なレトリック——こうしたものはむしろ作品をテーゼ小説の風刺的パスティーシュにしている」*Ibid.*, p. 196.

⁸⁰ *Ibid.*, p. 200.

すべてが次の点を示唆している。ウエルベックは意図的にこの論争を引き起こし、彼のフィクションの免疫を危機に陥れたのだ。ここで私たちは「ウエルベック」を一市民としてではなく、文学的な姿勢 (posture) として検討することができよう。⁸¹

免疫という比喻は、文学場の「自律」というブルデュー派社会学のコンセプトから出発することで理解できる。歴史上、文学は社会空間のなかではじめから自律性を認められていたわけではなく、権力や政治に従属的 (他律的) な立場を占めていたが、19 世紀中ごろ以降、複数の文学裁判を経ながら自律を獲得してきた。作者／語り手／登場人物の区別とは、社会的にスキャンダルになりかねない発言や行動を記述する上で、作者がその発言の責任を負わないための基盤となる理論的区別である。この意味で、文学が形成するフィクション世界は現実世界に対する免疫 (免責) を得たわけだが、登場人物に「ミシェル」という名前をつけて自伝的要素を匂わせ、公的発言のなかで登場人物に追随した発言をし挑発するウエルベックは、この免疫をみずから危険に晒す。メゾはこの事例から「作家の姿勢」 (posture auctoriale) というコンセプトを練り上げる。彼がそこで説明しているのは、ウエルベックにかぎらず現代の作家は、世論やマスメディアの時代を意識し、公的なイメージに合わせた自己演出を行うという事態である。ウエルベックの場合なら、フィクションの登場人物によって表明されたスキャンダラスな意見をあえて後追いすることで、挑発的でお騒がせな「ウエルベック」という作品を完成させる。この意味では、インタビューの発言は「パフォーマンス」として理解されるのである⁸²。

こうした議論から何を引き出すべきだろうか。エッセイやインタビューにおける発言が、作家の「パフォーマンス」として解されるなら、それを真面目に言っているのか不真面目に言っているのかという枠組みは無効になり、戦略的な観点から分析されるべき対象になる。この意味で、小説作品の語り手や登場人物の発言を作者自身の発言に帰せしめようとし、インタビューなどのエピテクストに当たる試みは、こうした戦略を考慮しないかぎり、困難に陥るはずだ。だが、そのことは作品やインタビューに「ウエルベック」の思想を見出し、それに対する批判を展開する試みの一切を無効化することにはなるまい。ここでの「ウエルベック」とは、ミシェル・トマという実名をもつ一市民としての人物というよりは、ミシェル・ウエルベックという筆名を選び、特定の自己イメージを作品の内外で演出する作家ということになるだろうが、一市民としての彼の伝記的要素もまた、そうしたイメージ形成に貢献している。文学社会学者のジゼル・サピロが論じるように、ウエルベックのケースは、「内在的批評の支持者には残念だが、フィクションはそれ自体が公的空間における作者の戦略や伝記的要素によ

⁸¹ *Ibid.*, p. 201.

⁸² 「現代アートから借りた技法を用いて、[...] これらの作家 [クリスティーヌ・アンゴ、フレデリック・ベグベデ、ヴィルジニー・デパント、ウエルベック] は彼らの人物像のメディア化と過剰に戯れ、それを作品空間のなかに取り入れる。彼らの著作とそれを知らしめるための姿勢が、ひとつのパフォーマンスとして手を合わせることになるのだ。」*Ibid.*, p. 203. 「姿勢」の概念については、同著者の以下の著作も参照。Jérôme Meizoz, *Postures littéraires. Mises en scène modernes de l'auteur*, Genève, Slatkine Érudition, 2007.

って解明される、ということの証明である⁸³」。もちろん読者は、こうした戦略を受動的に受け取るだけではない。それを積極的・批判的に解釈し、その種のメディア・パフォーマンス自体が有する反動性を批判するということは、読者の権利であろう。

結論にかえて——テーゼの快樂

以上の議論で私たちは、『プラットフォーム』までの初期作品と、同時期に作家が発表したインタビューなどに依拠しながら、作家に対して「反動的」という形容が付与されるようになった経緯を確認した。現代西欧世界を批判し、その責任を六八年五月革命や社会風俗の変化に帰し、フェミニズムやイスラムに対する挑発的な言動を繰り返し、「愛」が存在しえたより牧歌的な社会を夢想する……そうした「思想」の持ち主としてウエルベックは語られ、時に批判される。2002 年以降の「新しい反動」に関する論争は、こうした議論の傾向をより強化することになり、作品と作者の政治的な読解（およびそれからの擁護）は、ウエルベック批評・研究の一傾向になる。ここで躓きの石になるのは、フィクションと（作者の）思想表現の関係である。本稿が強調したのは、しばしば考えられるのとは異なり、批判者の議論のなかで作者／語り手／登場人物が単純に同一視されることは稀であって、その同一視を可能にする条件と、どの程度までそれを認めうるのかが取り沙汰されていたという点である。その条件は、「テーゼ小説」に関する議論と、「作中の登場人物の発言とインタビューでの作者の発言の一致」に関する議論に大別することができる。いずれの事例についても言えるのは、作者／語り手／登場人物の少なくとも部分的な同一性は、読者が作品に対して恣意的に読み込んでいるというより、作者自身によって（テキストの内外で）示唆されているという事実だ。このことは、ウエルベックが同時に作者／語り手／登場人物の区別を要求するとしても（これは作中のスキャンダラスな発言による訴追を避けるために当然必要な戦略である）変わらない。これは作者が読者および世間に対して仕掛ける危険な戯れであり、それに乗って作者／語り手／登場人物を同一視しながら批判すると罠にはまる危険があり、安直な「道徳主義的」読解の担い手だと批判されるリスクを負うことになる。だが、小説のポリフォニー性（バフチン）や「小説の思慮」（クンデラ⁸⁴）を支えにするだけで、こうした批判を全体的に無効化できると考えるのも、同じくらい安直なことに違いない⁸⁵。

⁸³ Gisèle Sapiro, *Peut-on dissocier l'œuvre de l'auteur ?*, Paris, Seuil, 2020, p. 67.

⁸⁴ セリーヌ研究者のアンリ・ゴダールは、「作家は自分の道徳的確信ではなく他者の声に耳を傾けようとする」という「小説の思慮」の考えをミラン・クンデラから借り受け、セリーヌの小説を反ユダヤ主義から救おうとしていた。Henri Godard, *Céline scandale* (1994), Paris, Gallimard, « Folio », 1998.

⁸⁵ 物語論（ナラトロジー）の専門家ラファエル・バローニが言う「ポリフォニー的批判」は、この点で問題を的確に捉えているように思われる。著者は、フィクションのポリフォニー性（多声性）を前提にしつつ、具体的な読書経験においては作品中に作者の声を聴き取るという営みが普通に行われていることを認め、その在り方を分析している。本稿の議論は著者の次のような記述に賛同するものである。「作家が文体を軽視すると公言し、登場人物の主張の一部を踏襲する姿勢を見せるとき、またオートフィクション的な装置を用い、〔作品の本筋から〕脱線した形式を頻繁に使用するとき、これらすべてはフィクションを現実世界に接近させることに貢献する。とはいえ、小説が（愛情不足や人間嫌いを吐露する）作者の視点を表現したものなのか、それとも「人間の一般的真理」を表明したものなのかを探る問いをめぐるのは、未決定な部分が残っている（ウエルベック作品の「対照的な」受容がその証左である）。」Raphaël Baroni, *Lire Houellebecq. Essais de critique polyphonique*, Genève, Slatkine Érudition, 2022.

少なくとも誰もが認めるだろうのは、ウエルベックの小説に多数のテーゼが登場するということだ。コルトハルス・アルテスの論文と同じ論集に掲載されたインタビューで、ウエルベックはやはり小説に固有の両義性を語っている。そこで彼は、あなたが書いているのはテーゼ小説かと尋ねられ、「誰にでもテーゼはあります。人間はみなテーゼをもっているし、私の登場人物も例外ではありません⁸⁶」と答える。明言を避けつつも、それはあくまで登場人物がもつテーゼであって、作者自身のものではないと示唆する形だ。こうした「テーゼ」への執着は、ウエルベックを「哲学的小説」の伝統におのずから組み込む。だが直後でウエルベックは、そのテーゼを登場人物からさえも解き放ち、「テーゼそれ自体」が存在すると語っているように見える。

MdH - 登場人物が作者の代弁者とは言えないですね。

MH (ウエルベック) - 言えません。テーゼそれ自体の快楽が存在するのです。たとえば、一番敵を作ったテーゼのひとつは、『プラットフォーム』のエジプト人のそれですが、このテーゼは要するに宗教は一神教的であるほど馬鹿げているというものでした。これは明らかに通念に反した意見ですが、それほど愚かな意見というわけでもありません。結局のところ、私がそれについてどう思うかはよくわかりません。⁸⁸

別のインタビューでウエルベックが「[...] 唯一神を信じるというのは馬鹿のやることだと私は思いました。それ以外の言葉はありません」と言っていたのを知っている私たちは、同じ問題について「私がそれについてどう思うかよくわかりません」と言う彼の言葉に困惑してしまう。だがその種の矛盾は彼につきもののだとして、むしろ冒頭の「テーゼの快楽」に注目しよう。ロラン・バルトの「テキストの快楽」にも比すべき「テーゼの快楽」は、ウエルベックがなぜ作中に好んでテーゼを描くのかを説明するだろう。彼は自分が作家としてテーゼを読者に押し付けたいのではなく、テーゼを書き留めること自体が思考実験的に楽しいのだとして、作者の責任を回避する。こうした責任回避を批判して、社会を逆撫でる反動的意見を小説で自由に表明しているに過ぎないと批判することは可能だ。だがおそらく、そうした批判者でさえ、ウエルベックのテキスト内部にはテーゼが浮遊しているという奇妙な印象を抱かないわけにはいかない。だからこそ「それを言っているのは誰なのか」という問いかけが、ウエルベックの読者には切迫した必要とともに感じられるのではないだろうか。

⁸⁶ Martin de Haan, « Entretien avec Michel Houellebecq », dans *Michel Houellebecq, op. cit.*, p. 16.

⁸⁸ *Ibid.*